



ちょう つぼ
丁の坪遺跡
片山遺跡

1981

松江市教育委員会

は じ め に

松江市の最西端にあたる大野地区は、従来から公民館の主導で文化財研究活動が盛んなところである。

昭和45年に刊行された「大野郷土誌」、さらにそれを補足する意味で昭和53年に刊行された「続大野郷土誌」には、その成果がよく表われている。

今回、調査の対象となった両遺跡は、「続大野郷土誌」に紹介されているが、調査の結果、遺跡の性格の一端をうかがうことが出来たことは、大野地区の郷土史を考えるうえで貴重である。

本書を読まれる方、とりわけ大野地区の方々が今回の大野地区でのはじめての発掘調査を通して、今後一層文化財に対する关心と理解を深められることを願って止みません。

昭和56年3月

松江市教育委員会

教育長 内田 荣

凡　　例

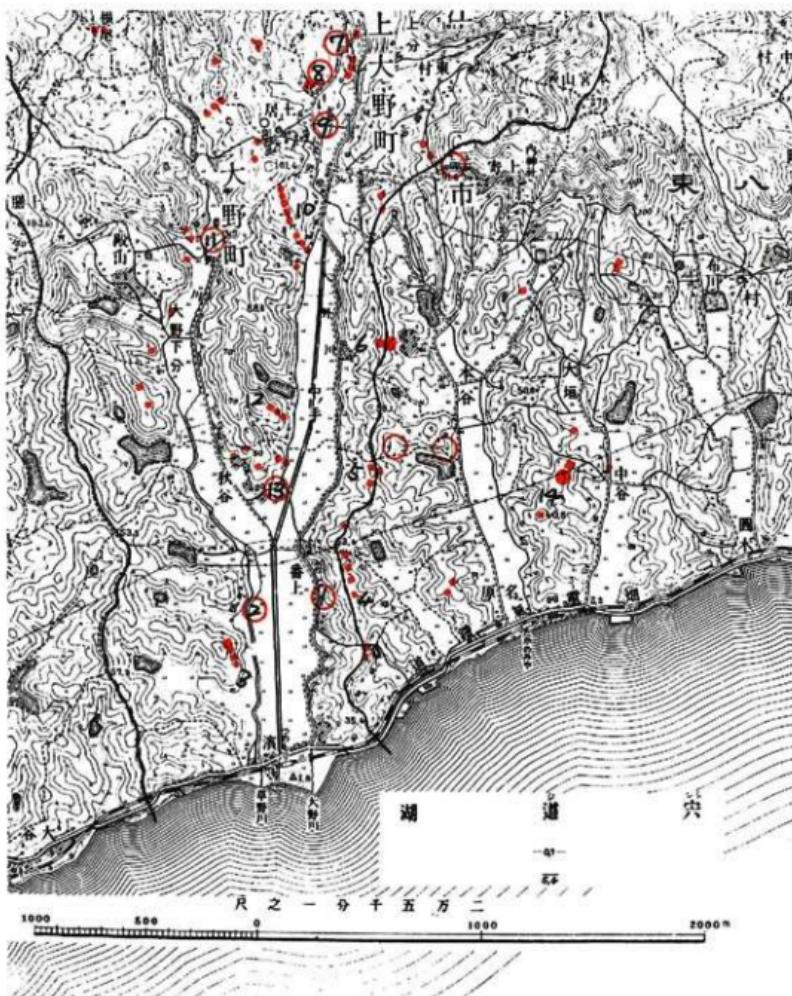
1. 本書は、昭和55年度補助事業として松江市教育委員会が実施した、「丁の坪遺跡他発掘調査」の報告である。
2. 発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

主体者 松江市教育委員会 教育長 内田 榮
事務局 松江市教育委員会・社会教育課
総括 松江市教育委員会社会教育課長 石飛 進
庶務会計 同上 文化係長 足立 千利（昭和55年10月まで）
同上 中西 宏次（昭和55年11月から）
同上 文化係主事 加藤 駿
担当者 同上 文化係主事 関崎雄二郎
同上 中尾 秀信
補助員 加藤 博己 有田 康雄

3. 作業にあたっては、下記の方々の協力を得た。（敬称略）

| | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|
| 玉木 明 | 玉木 孝 | 金坂 龜 | 岩成 俊雄 | 岩成 礼子 |
| 木村タケノ | 木村 光枝 | 岩成 草子 | 金坂 琴 | 田中ケイ子 |
| 清水 末子 | 玉木ツネノ | 山野 洋子 | 小林 要子 | |

4. 調査の準備にあたっては、大野公民館職員の方々、作業の段取りについては、玉木明、玉木孝、金坂亀氏から多大な協力を得た。記して感謝する次第である。
5. 本書の編集は、主として岡崎が担当した。
6. 図面、写真の整理、浄書は、中尾が担当した。
7. 出土遺物、遺跡の検討については、奈良国立文化財研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室長町田章氏に、現地指導を仰ぎ、有益な御教示を得た。記して、感謝の意を表する次第である。



第1図 周辺の遺跡分布図

- | | | | |
|----------|--------------|-----------|-----------|
| 1. 丁の坪遺跡 | 2. 片山遺跡 | 3. 新宮山古墳群 | 4. 丁の坪古墳群 |
| 5. 北廻古墳群 | 6. 平廻古墳 | 7. 坂本遺跡 | 8. 小谷遺跡 |
| 9. 土居遺跡 | 10. 高崎・南山古墳群 | 11. 高木遺跡 | 12. 李戸古墳群 |
| 13. 山崎 | 14. 大垣大塚古墳群 | | |

I 調査にいたるいきさつ

両遺跡は、いずれも近年河川の護岸工事中に発見されたものであるが、水田地帯に隣接していることもあり、その範囲や遺跡の性格については、不明確であった。ところが、大野地区一帯の水田14ヘクタールについて、昭和56年度から3か年計画で県営は場整備事業が実施されることになり、両遺跡が、区域内に含まれることが判明した。そこで、遺跡の範囲や性格について発掘調査を実施して確認し、保護のための基礎資料とすることになった。

調査は、昭和56年1月27日から、同年3月25日までの内、計24日間を費して行なわれた。

II 位置と歴史的環境

両遺跡は、松江市の西端大野地区の南北にのびる細長い谷間水田のやや宍道湖よりに所在する。

丁の坪遺跡 現在の大野中学校校庭のおよそ100m南方の、大野川の河川敷に所在し、その地籍は、大野町丁の坪174番地である。

昭和39年、山陰地方を襲った未曾有の集中豪雨によって、大野川はほぼ全域にわたって堤防が決壊した。その為、翌40年から41年にかけて護岸工事が実施された。

この工事で、川底をさらに1~1.5メートル掘り下げると共に、それまでの川のルートを水田側に若干変更し、直線に近くした。

この時、川底から多量の土器が出土した。出土遺物は次のとおりである。

長頸壺1個、双耳壺1個、环身4個、高环2個、甕1片、壺2片、提瓶1片、甕5片

土師器甕壺1片、甕1片、瓦器質の土縛1個

この内、环身の1個は、糸切底で、底外面に「館」という墨書銘があり、極めて類例まれた土器として注意される。^{注1}

本遺跡の背後の丘陵には、丁の坪古墳群がある。これは計6基の方墳から成るもので、いずれも未調査で、一辺10m前後、高さ1m余りの、小規模のものである。

片山遺跡 大野の谷間の西岸を流れる草野川の河川敷に所在する。昭和51年の護岸工事の際の上げ土の中から、土器片を採集したもので、いずれも、古墳時代の中頃のものである。^{注2}

出土遺物は、須恵器の壺の頭部の破片、土師器高杯の破片などがある。

本遺跡の南方200mをへてた、標高50メートル余りの狭い丘陵尾根上には新宮山古墳群が存在する。^{注4} 1基の前方後方墳と2基の方墳とからなるが、第1号墳とされている前方後方墳は全長20mあり、後方部に箱式石棺を有する。又、墳裾からは、円筒埴輪が発見されている。大野地区はもとより、島根半島部でも数少ない前方後方墳として注目される。

第1表 周辺の遺跡一覧

| 画面番号 | 名 称 | 所 在 地 | 区 分 | 種 類 | 規 模 | 他 | 備 考 |
|------|----------|--------------------|-------|-------|---------------------------|-------------|-----|
| 1 | 丁の坪遺跡 | 大野町174他 | 遺物包含地 | | 弥生前期～中世 | | |
| 2 | 片山遺跡 | 上大野町 | “ | | 弥生前期～平安 | | |
| 3 | 新宮山古墳群 | 大野町2336-14 2333 | 古墳群 | | 前方後方墳1 方墳2 | 箱式石棺あり | |
| 4 | 丁の坪古墳群 | 大野町2278他 | “ | | 方墳6 | | |
| 5 | 北堀古墳群 | 上大野町2105-1 | “ | | 方墳2 不明1 | | |
| 6 | 平堀古墳 | 上大野町2116 | 古 墳 | 前方後方墳 | 長43.5m | 大野地区最大 | |
| 7 | 坂本遺跡 | 上大野町1632 | 遺物包含地 | | 50×50m 後期須恵器片 | | |
| 8 | 小谷遺跡 | 上大野町 | “ | | 10×5m 須恵器片 | | |
| 9 | 土居遺跡 | 上大野町1810-1 | “ | | 長頸壺の破片 奈良～平安 | | |
| 10 | 高崎・南山古墳群 | 上大野町2660-7 他 | 古 墳 群 | | 方墳8 | 箱式石棺あり | |
| 11 | 高木遺跡 | 上大野町937-2 | 遺物包含地 | | 20×20m 後期須恵器片 | | |
| 12 | 塙戸古墳群 | 大野町2681-1 | 古 墳 群 | | 方墳3 | 箱式石棺あり | |
| 13 | 山崎遺跡 | 大野町629 621 | 遺物包含地 | | 50×50m 後期須恵器片 | | |
| 14 | 大垣大塚古墳群 | | 古 墳 群 | | 円墳直徑53 高9m 方墳36×33m | 円筒埴輪片 あり | |

III 調査の概要

1. 丁の坪遺跡

これまでに土器が出土した範囲の河川敷の北西側に隣接する水田を中心に、4mグリッドを計8か所設定し調査したが、いずれも小さな土器片がわずかに包含され、遺構面らしきものもなく、地山も確認できなかつたので、遺跡の中心からはずれていると判断し、3区と5区については、調査を取り止めた。

堆積土層の検討

4区東壁の中央部を標準として観察してみたい。4区では水田耕作土（第I層）が厚み15cm、褐色砂質土（第II層）が20cm、褐色粘性土（第III層）が20cm、灰色粘土（第IV層）が100cm、その下層は緑色砂礫層（第V層）が23cm、褐色砂層が8cm（第VI層）最下層は、灰色砂層と灰色シルトの互層（第VII層）となり、深さ32cmまで確認したがしっかりした地盤は無く、壁が崩壊する恐れがあったのでこの深さ（水田面から218cm）で調査を打ち切った。

第IV層までは水田開発にあたって客土された可能性が強いが第V層以下は砂層や砂礫層シルトと砂の互層となり自然堆積土である。砂層や砂礫層は川筋もしくは湖岸付近であることを示し、最下層の互層はシルト層に木の枝を腐らないまま含んでおり沼澤地であったことが知られる。各グリッドの灰色粘土層をみると丁の坪地区では、北から南へゆるやかに土層が傾斜していることが知られる。

第V層までは各時代の遺物が混在している。すなわち古式土師器片、山陰Ⅳ期の蓋坏片系切り底の坏、中世陶器などが認められる。最も新しい時代の所産である中世陶器（亀山焼類似品）を包含している第V層から上部の土層は中世初頭頃に堆積したことが知られる。

出土遺物の検討（第3図参照）

1区 遺物包含層は、第II層（褐色土）から第V層（緑色砂礫層）まで連続して確認できた。

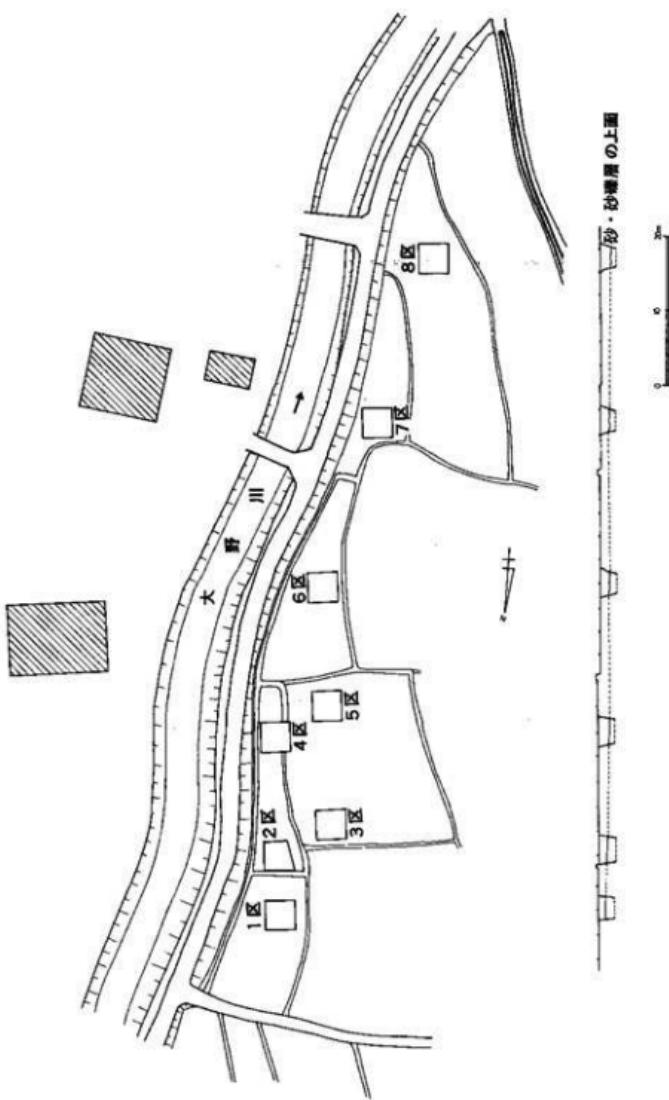
第II層では、須恵器系切底の坏身（第3図1）山陰Ⅲ期頃蓋坏体部、大形甕片が認められる。

第IV層では、灰色粘土の下半部から遺物の量を増し、須恵器では、波状文を受けた甕口縁（第3図2）や、系切底の坏身、土師器では、細片が若干認められる。

第V層では、やはり須恵器甕片や、系切底の坏身があるが、中でも須恵器の系統をひく中世的な甕片もあり注意される。

第VI層では、最下部から須恵器系切底の坏身が出土した。

第2図 丁の坪邊跡調査グリッド設定図及び断面図



1は、須恵器の壺で底外面に糸切り痕をのこす。底径7.2cmを計る。第IV層（灰色粘土）から出土。2は、須恵器大形甕の口縁部で先端を欠く。不明瞭な凹線文の上に4条の太い波状文を施し、さらに上部に凹線文と波状文を繰り返す。器内は1.1cmある。平安期のものであろう。3は、第VI層（緑色砂疊層）から出土。須恵器系統の大形甕の頭部の破片である。器厚は1~1.2cmと厚く、体部外面に4×2.5ミリ前後の格子目叩き文を有し、体部内面には間隔の広いカキ日整形を施す。龜山焼に類似する。

2区 遺物は、第IV層（灰色粘土層）の下半部から多くなり、第V層（褐色砂疊層）の上半部まで連続して出土した。

第IV層では、須恵器高台付壺身や、大形甕の頭部（第3図4）、山陰Ⅳ期の壺身や、盤片が、第V層では、山陰Ⅳ期の蓋壺の蓋や土師器（器形不明）が出土した。

次の第VI層では、弥生後期前半頃の甕の口縁部が発見されている。（第3図5）第VI層の上半部では土師器の小片（器形不明）が若干出土し、それ以下は無遺物層となっている。最下層の第V層は、砂とシルトの互層となっており、木の枝の破片を含む。層厚60cmまで確認したが、しっかりした地山は、表われなかった。

4は、第V層（灰色粘土層）下部から出土。頭部での直径26cmを計る須恵器大形甕の破片である。口縁部はゆるやかに外反し、内外面共に荒いナデ調整を施し、頭部内面は体部との接合時に生じた指頭圧痕を遺存する。体部外面は平行叩き目、内面は深い同心円文を付ける。器厚は口縁部で1.1cm、頭部で1.8cm、体部で1.5cmを計る。5は、第VI層（褐色砂質土）から出土。弥生時代後期前半頃の甕の口縁部である。口径26cm、25cmのくりあげ口縁をもち、頭部がくの字状に屈折して体部は器厚がうすくなる。口縁部に6条の凹線文を入れる。調整は磨滅著しく不明である。

4区 第IV層（灰色粘土層）から第V層の上界面付近までが、遺物包含層である。

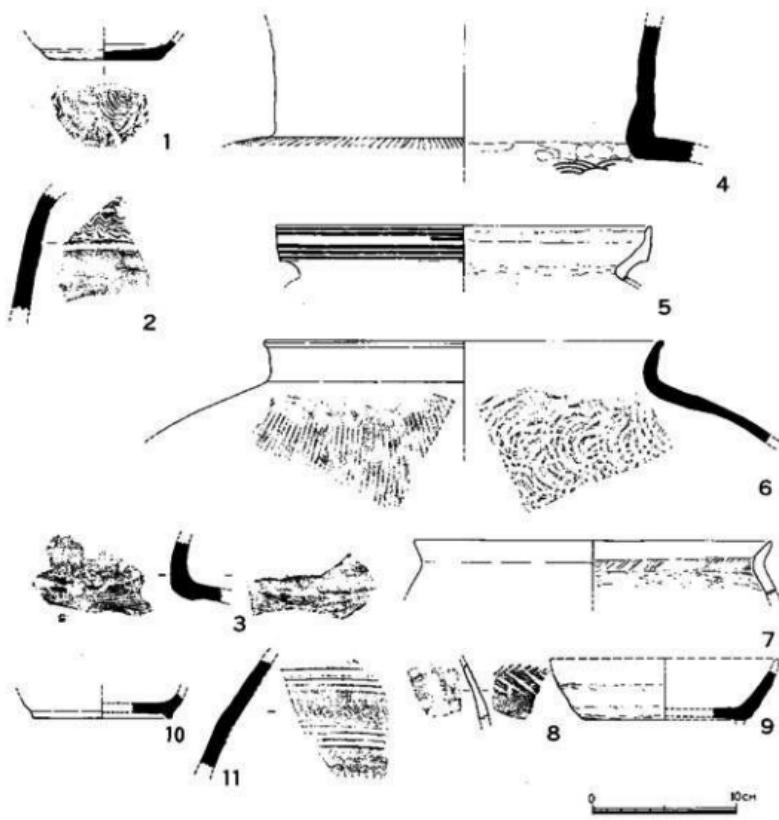
第IV層では、須恵器甕の口縁（第3図6）、糸切底の壺身、土師器では、甕の口縁や蓋の凝宝珠つまみの部分などがある。

第V層では、須恵器糸切底の壺身、甕の口縁や頭部、土師器では、糸切底の壺身がある。

第VI層とV層の界面付近では、土師器の小片が若干出土したが、器形は不明である。

最下層は、2区同様、砂とシルトの互層で、木の枝を多く含む。

6は、第IV層（灰色粘土層）から出土。口縁径27.6cmを計る須恵器大形甕の口縁から体部にかけての破片である。口唇部はやや外反し厚みはうすくなる。体部外面に平行叩き



第3図 丁の坪遺跡出土遺物実測図

目、内面に同心円文を付ける。

6区 第V層の灰色粘土層下半部から第IV層（緑色砂質土）までが、遺物包含層である。

第V層では、須恵器山陰Ⅳ期の坏身、土師器では、糸切底の坏身などが出土した。

第IV層では、須恵器山陰Ⅳ期の坏身、高台付坏身（第3図9）や、土師器壺、甕の類がある。特に羽状文を有する占式土師器の小片が見つく。（第3図8）又、古墳時代後期頃の単純口縁を有する土師器甕の口縁部も認められる。（第3図7）

7は、第IV層（褐色砂質粘性土層）から出土。土師器甕の口縁部の破片。単純口縁で口縁径24.8cmを計る。外面は横ナデ調整、内面は口縁部が横ナデ、頸部が斜方向の刷毛目、体部が浅いヘラ削り調整を施す。古墳時代後期頃のものであろう。8は、第V層（灰色粘土層）から出土。壺の体部上半部で外面は刷毛目調整を施した上にクシ又は貝殻複縁で羽状文をつける。内面は横方向のヘラ削り調整を施している。鍵尾II式に含まれる古器器である。9は、第VI層（緑色砂質土層）から出土。底径11.2cm、口縁推定径15.6cm、推定器高4.2cmを計る。須恵器の高台付坏身で、高台は接合部から欠失している。底外面には糸切り痕を遺存する。

7区 第IV層から第VI層までが遺物包含層である。

第IV層では、須恵器片（器形不明）、第V層（灰色粘土層）では、須恵器高台付坏身（第3図）や甕片、蓋の口縁部がある。

第VI層では、山陰Ⅳ期の坏蓋や甕片、土師器では、高台脚部、甕の口縁、糸切底の坏身がある。

第VII層以下は、無遺物層である。

10は、第V層（灰色粘土層）から出土。高台付の坏で高台径9.6cmを計る。底外面が糸による切り離しかどうかは不明。

8区 第II層、第IV層、第V層が遺物包含層である。

第II層は、耕作土の直下の褐色土で土師器の小片（器形不明）がある。

第IV層では、須恵器、土師器片（器形不明）が認められた。

第V層は、灰色粘土層で須恵器蓋や坏身、甕、壺の破片、又、凹線文の間に波状文を付ける器台の脚部、又は、甕の口縁部の破片（第3図11）がある。

第VI層以下は、無遺物層である。

11は、須恵器大形甕の口縁部又は器台の脚部になるもので、3条から4条の回線で区画した内側に細かい波状文を施す。内面は横ナデ調整を施す。第V層（灰色粘土層）の下部から出土。

2. 片山遺跡

以前 土器片の採集された河川敷の東側、ほ場整備区域内の水田地に、4mグリッドを計4か所設定し調査した。

堆積土層の検討

1区南壁の土層を標準として観察してみたい。水田面から下方へ耕作土（第Ⅰ層）が20cm、明褐色砂質土（第Ⅱ層、下部はやや粘性を増す）が55cm、暗褐色砂質土（第Ⅲ層）が65cm、灰色～明褐色の砂礫層（第Ⅳ、V層）が55cm以上確認出来た。

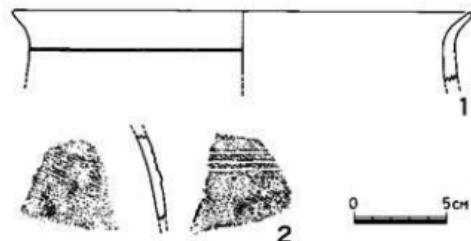
丁の坪地区と違い灰色粘土層が存在せず、端的にいって上部が砂層、下部が砂礫層となっており川筋にあたっていたことが知られる。

後述するように最下層の明褐色砂礫層からは弥生前期の甕の破片が出土しており他の時代の遺物を全く含んでいないことからこの層はおおむね弥生時代に形成されたのであろう。

上位のⅡ層～Ⅲ層までは須恵器や土師器の糸切り底の壺や須恵器、土師器片を少量含んでおり古墳時代以後の堆積であることが知られる。

各グリッドの下部にある砂及び砂礫層をみると北から南へ上層はゆるやかに傾斜していることが知られる。

出土遺物の検討



第4図 片山遺跡出土遺物実測図

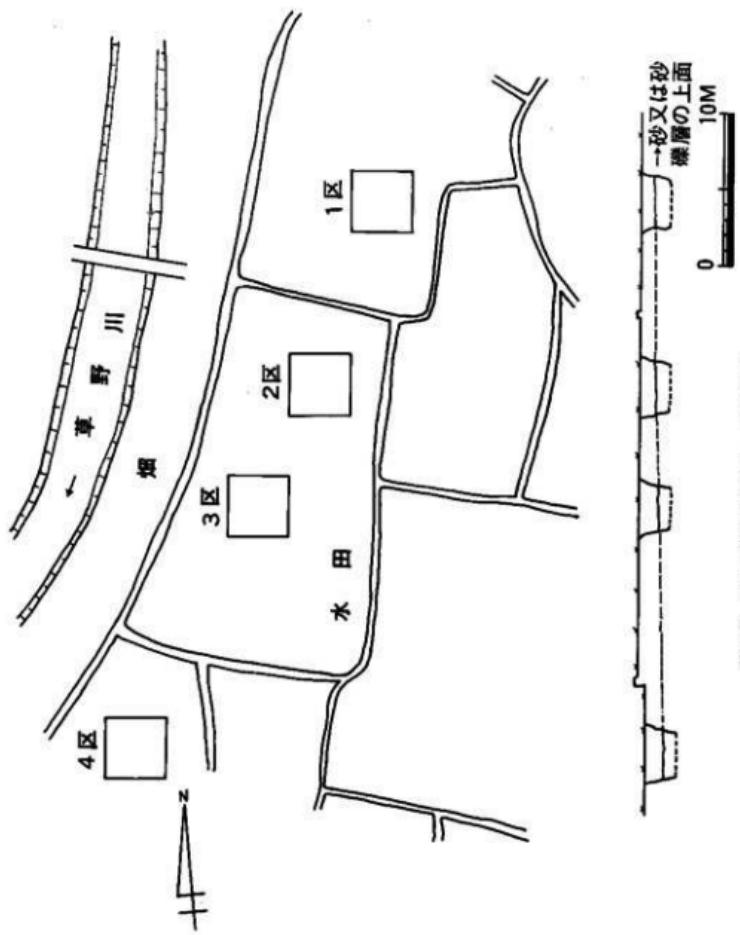
1区 最下層の明褐色砂礫層から弥生前期前半頃の甕片が、4片まとまって出土した。この内、1片は口縁部から頸部にかけての破片で、1条の沈線を有するもの（第4

図-1）他の1片は、壺の体部上半部の破片、他

の2片は、体部の破片で、内面に刷毛目調整を施すものである。

これ以外に、どの層からも遺物は、発見されなかった。

1、2は、第Ⅳ層（明褐色砂礫層）から出土。いずれも弥生前期の土器である。1は、甕の口縁から頸部にかけての破片で、口縁はゆるく外反して肥厚せず口径24.6cmを計る。頸部には1条のヘラ描き沈線を入れる。体部はやや張る。内外面共に横ナデ調整を施し、特に頸部以下の内面はやや磨研している。2は、壺の体部上半部の破片で内外面共に、斜



第5図 片山遺跡調査グリッド設定図

め方向の刷毛目調整を施し、外面に3条のヘラ描き沈線を入れる。

2区 第Ⅲ層の砂質粘土層から土師器の坏身の破片が出土したのみで、他の層では、遺物は含まれていなかった。

3区 耕作土層から、須恵器壺や坏身、土師器の糸切り底の底部が出土したが、これは、隣接する草野川を、近乍護岸工事した際の上げ土を水田に均したもので、二次的な堆積土といえる。

第Ⅳ層（灰色粘土層）からは、須恵器糸切底の坏身や、器形不明の土師器片が出土した。

第Ⅴ層以下は、無遺物層である。

4区 3区同様、耕作土から、土師器や須恵器の壺片が出土したが、客土による2次堆積である。

IV 小 結

1. 丁の坪遺跡について

前述したとおり、いずれのグリッドでも、遺構面、地山面は確認出来ず、土器片がわずかに包含されているのみであった。しかも各時代の遺物が混在して出土し、摩滅したものが多いことから、川の氾濫などによって上流から押し流されて堆積した可能性が強い。

特に2区の褐色砂層からは、弥生後期前半頃の蝶の口縁が出土している。しかしながら量的に最も多いのは、やはり、奈良時代から平安時代にかけての須恵器壺身である。これは、糸切底の平底を有する通有のものである。他に高台付の壺や盤の類が認められる。

前回出土した主な遺物も、ほぼ西暦8世紀の中頃か、それより若干古い時期に推定され^{注5}ており、しかも、今回出土の状態が、摩滅したものが多いことから、遺物が原位置からやや流れて堆積した可能性が強いのに対して、前回の一括出土品は工事中に発見され、出土状況が明確でないが、完形もしくは、ほぼ完形に近いものが多いことが注意される。

これは、ふつうの住居跡などではなく、溝もしくは、井戸跡のようなところでお祭りした可能性の強いものである。^{注6}

次に「館」の墨書銘を有する壺身であるが、糸切底を有する須恵器は出雲部では、奈良後期から平安期にかけて盛行するもので、この時期、何らかの建物があったことになるが、それが公的機関の施設であったのか、私的な豪族の居館であったのかは、これまでの調査結果からは、断定出来る資料はない。^{注7}

今回調査した地域では、水田面から2m余り地下でも、地山面は確認されず、当時も水田もしくは低湿地であったと思われる。又、前回一括出土した地点は現在の川中に位置するが、ここに何らかの遺構があったとしても、出土した深さは、やはり現在の水田面より1.5~2.0m位深い位置であったと思われる。

のことから、本遺跡の中心部は、東側のゆるやかな斜面で、現在、農家に狭まれた畠地となっている一帯であろう。この畠地でも、須恵器片は、かなり広範囲に採集され、地山面は浅いので、もし「館」に相当する建物があったとすれば、この場所ではなかったかと思われる。

2. 片山遺跡について

丁の坪遺跡同様、各グリッドでは、遺構面、地山面は確認されず、少量の土器片が包含

されていただけであった。

前回の出土品はおむね、古墳時代の中期のものであったが、最下層の明褐色砂躰層からは、弥生時代の前期の土器片が出土した。これは大野地区初例のものであり、農耕文化が山陰地方沿岸に伝播するやいち早くこの大野地区でも弥生文化が成立したことが分かる。一方、奈良・平安期のものも出土したことから、この片山地区でも律令制の時代、付近に集落のあったことが知らされるのである。

推定される生活の場は、今回の調査地点と西側の丘陵との間水田地帯ではなかろうかと思われる。

注1 大野公民館「続大野郷土誌」26~33頁 昭和53年7月

注2 注1 18頁

松江市教育委員会「松江の埋蔵文化財」1980

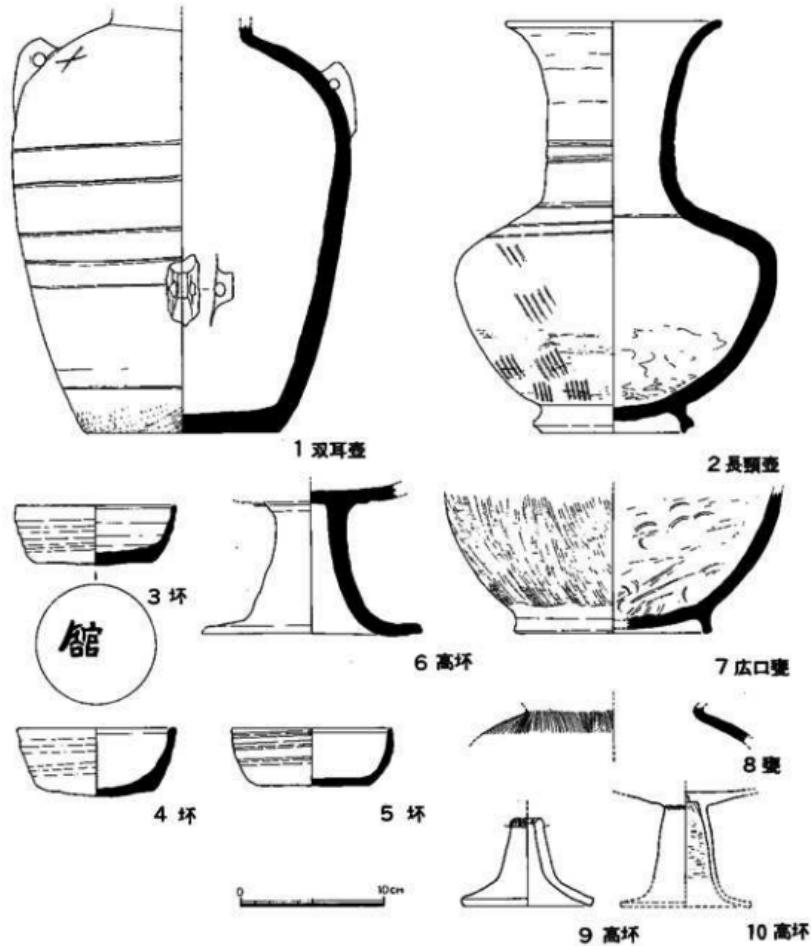
注3 注1 16、18頁

注1 11~18頁

注5 1976年当時、奈良国立文化財研究所に勤務の吉田恵二氏の御教示による。氏によれば、長頸壺は大阪府船橋遺跡、平城京左京一条三坊の溝S D 485出土のものに類似し大体8世紀の前半頃と考えられている。本出土例は叩き技法を残す点で古い技法を受け継いでいる。又、双耳壺の類例は、平城京東市出土のものがある。東市例は、平城宮跡土塗S K 820出土土器（760年前後）と同じ土器を共伴している。広口壺は外面叩き、内面同心円当て板がある点からは平城京左京一条三坊の溝S D 485（730年前後と考えられている）出土の広口壺に相当する器形ではないかと考えられる。

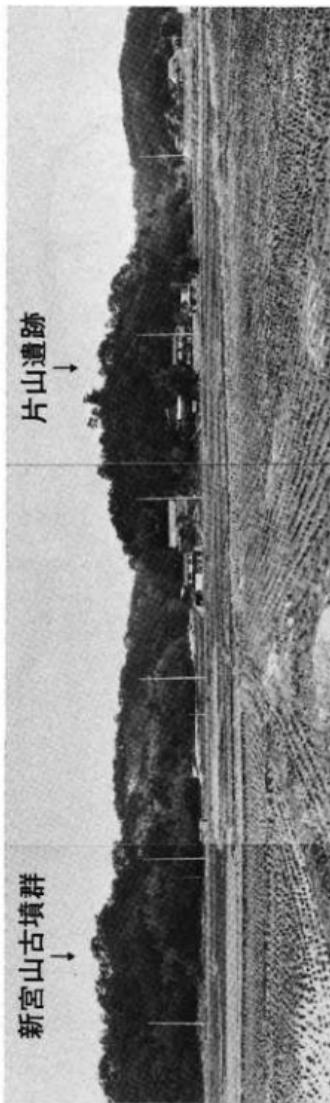
注6 昭和56年2月19日、調査指導に訪れた奈良国立文化財研究所の埋蔵文化財センター遺物処理研究室長 町田章氏の意見。

注7 注1に同じ。

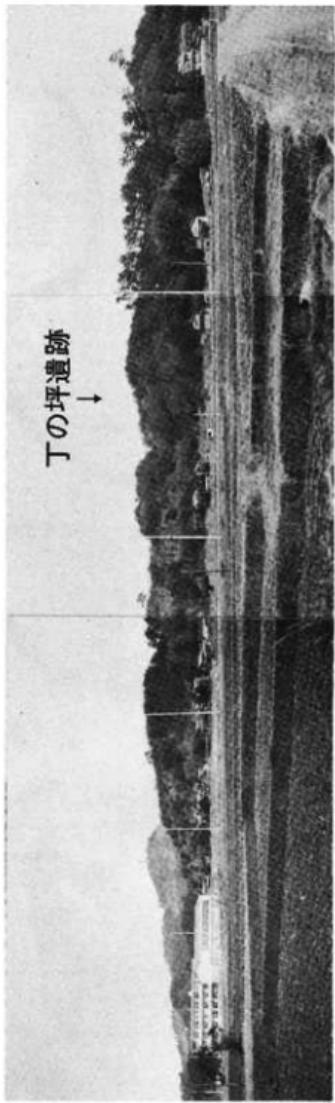


第6図 丁の坪・片山遺跡出土品実測図
(1~7 丁の坪遺跡、8~10 片山遺跡)

片山遺跡全景



丁の坪遺跡全景



丁の坪遺跡

片山遺跡

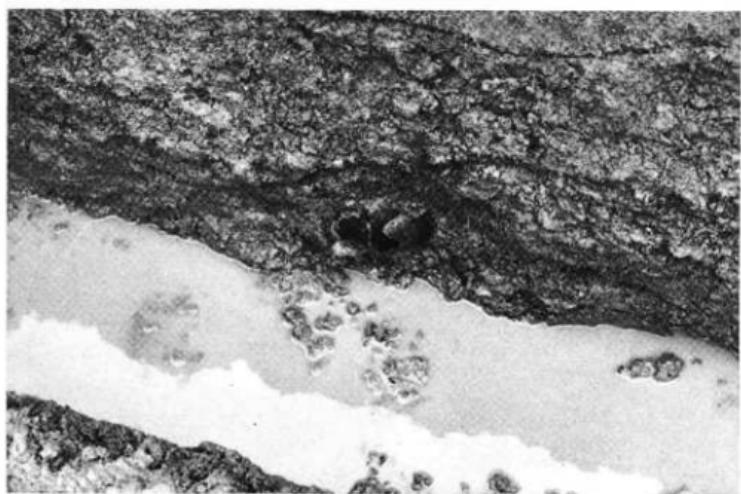
新宮山古墳群



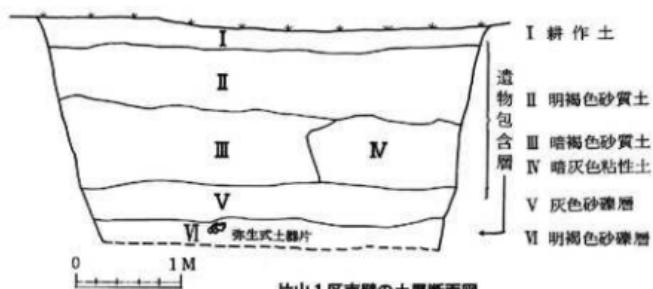
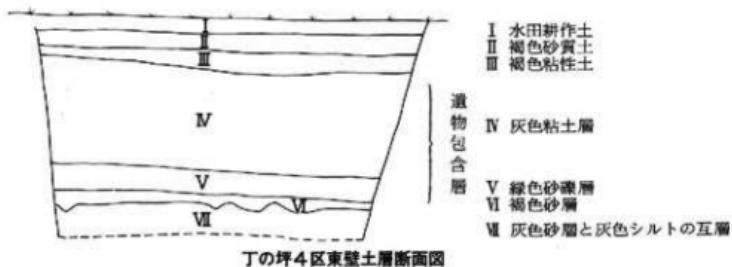
丁の坪遺跡2区東壁土層堆積状況

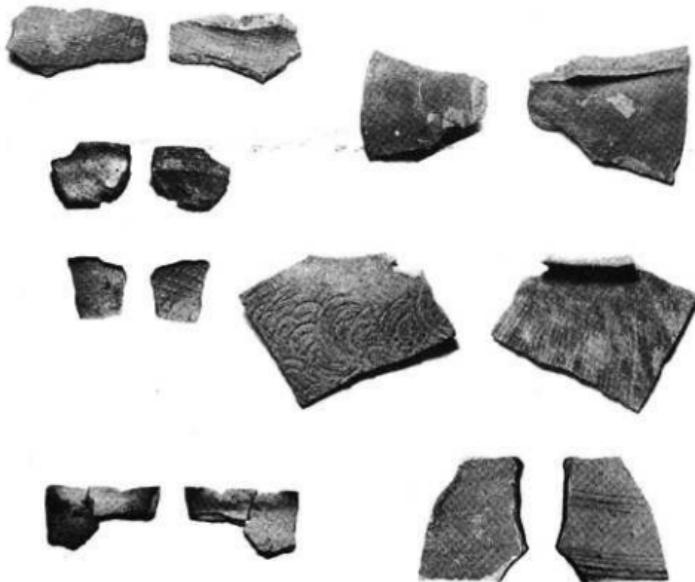


丁の坪遺跡4区東壁土層堆積状況



片山遺跡1区明褐色砂疊層中、弥生前期壺片出土状況





丁の坪遺跡出土遺物



片山遺跡出土遺物



丁の坪遺跡既出土品



片山遺跡既出土品